

2007 世界卓球選手権ザグレブ大会観戦報告

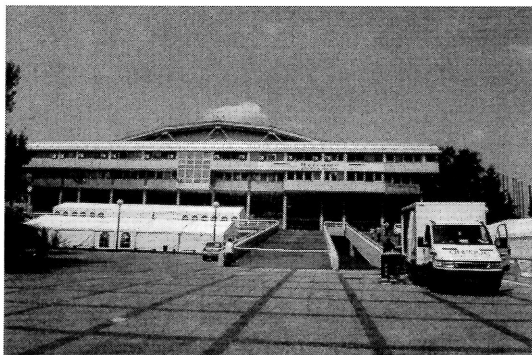
高島規郎

開催地 (クロアチア・ザグレブスポーツホール)
期 日 (2007年5月21日 - 27日)

1. はじめに

今回の開催国であるクロアチア (正式名: クロアチア共和国) は、世界遺産ドブロクニクを始め、ヨーロッパの中でも旅行者の人気も高く、特にアドリア海沿岸に点在する都市は「アドリア海の真珠」と呼ばれている。

1990年に始まった独立戦争により、旧ユーゴスラビアから苦難の独立を経て、平和を取り戻した。人口は、約440万人で、面積は日本の九州の約1.5倍にあたる。会場は首都のザグレブ (Zagreb) で開催された。



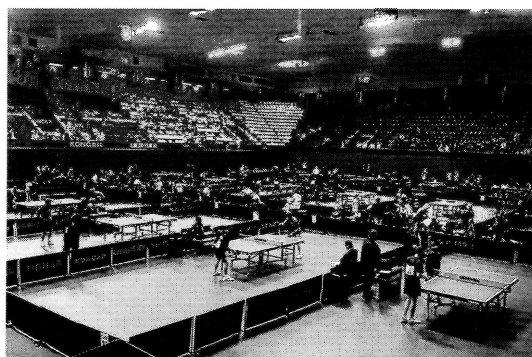
ザグレブスポーツホール

2. 世界卓球選手権ザグレブ大会 (個人戦スケジュール)

5月21日 開会式
MS 予選グループ・WD 予選ラウンド
5月22日 MS1 回戦 / WS 予選グループ・1 回戦 / MD 予選ラウンド 1 回戦

WD1 回戦 / XD 予選ラウンド・1 回戦
5月23日 MS1・2 回戦 / WS1・2 回戦 / MD2 回戦 / XD1~3 回戦
5月24日 MS3 回戦 / WS3 回戦 / MD3 回戦・準々決勝 / XD4 回戦・準々決勝
5月25日 MS4 回戦 / WS4 回戦・準々決勝 MD / 準決勝 / XD 準決勝・決勝
5月26日 MS 準々決勝 / WS 準決勝・決勝 MD / 決勝
5月26日 MS 準決勝・決勝 WD / 準決勝・決勝 閉会式

※ MS = 男子シングルス
WS = 女子シングルス
MD = 男子ダブルス
WD = 女子シングルス
XD = 混合ダブルス



会場メインフロア

3. 世界から見た日本選手の現状について

2008年北京オリンピックを1年後に控えたこの世界卓球選手権の成績によって男女20名ずつのオリンピック自動出場枠が決まり、世界ランキングの上位を狙う選手にとって大きく影響する大

会でもある。現段階では男子 30 位まで、女子 32 位までの選手がオリンピックへの切符を手にすることができる。

世界の卓球は、中国が中心に上位を占めている。中でも女子の世界ランキングでは、上位 50 人中に 31 人が中国選手である。また、元中国の帰化選手も外国から出場し、上位に進んでいる。日本選手は、男子においては、中国、韓国および欧州勢の壁は厚く、現在ではメダルの可能性は非常に薄いと言える。女子においては、中国系選手からの包囲網の中で戦っているような感じがする。

日本選手の力量を客観的に見た場合、実力的には、世界ランキングに表れているように、女子の福原愛選手の 12 位をトップとして 100 位以内に数名の選手が入っているのが現状である。しかし、近年、有望な若手選手の活躍が目立っており、将来世界に通用するための経験が必要である。



各国応援団

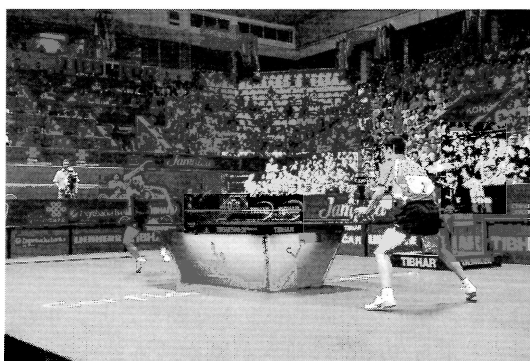
4. 日本選手の戦績について

日本男子は、2 年前の上海大会では振わず、2006 年のチーム戦でも 14 位という記録に終わっていることから、予想は期待されていなかった。ところが全日本チャンピオンの水谷選手（青森山田高校）は 2 回戦で、世界ランク 11 位の李静（香港）に完勝し、3 回戦でも中国帰化選手のガオ・ニン（シンガポール）に 3-0 とリードしながら、後半 4 ゲーム連取され、惜しい負け方をし

た。また、16 歳の松平選手は 1 回戦で世界ランク 22 位のコルベル（チェコ）にストレート勝ちするなど、日本の 10 代の才能ある若手の活躍には将来が楽しみである。男子ダブルス 3 回戦では、水谷、岸川組が、中国の郝帥・馬龍と対戦し、中国ペアを圧倒し、4-1 で格上の選手に勝利した。水谷選手は今大会、単複で計 10 試合戦い、7 勝 3 敗と大活躍であった。

一方、日本の女子選手の成績は期待はずれの惨敗であった。2 年前の上海大会からテレビ放映があり、2006 年のプレーメン大会では、日本女子のメダル獲得もあり、テレビの視聴率も高く、大いに卓球に沸いたこともあり、そして、今回、世界卓球 2007 年を宣伝し、盛り上がりを見せていた。

ところが、期待された女子選手は次々と敗れ、上位を狙える力をつけた福原選手も伏兵ルーマニアの選手に敗退した。全日本チャンピオンの平野選手もルーマニアの選手に逆転負けを喫した。女子は、すべての種目でメダルを逃し世界のレベルの高さを痛感する結果に終わった。



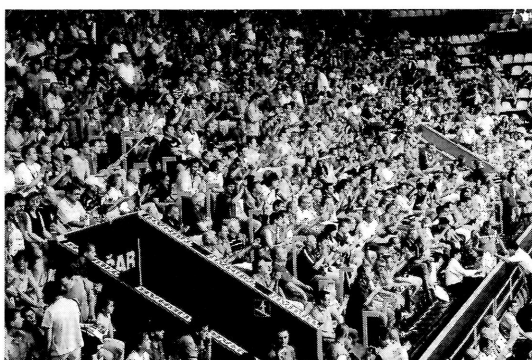
男子シングルス決勝

5. 世界の現代卓球の特徴について（総括）

全体的には、今大会は中国が全 5 種目を制し、世界における中国の強さが突出した大会であった。完全制覇する中国の強さは、2008 年の北京オリンピックに向けた、絶対に負けられない危機意識がプレイに見られた。



女子シングルス決勝



スタンド風景

① 技術編

○台上テクニクの攻守…前陣でのプレイからコースの厳しさ、しかも打球点が速くスピードがある。

ストップ性の止めるボールが少なくなり、より積極的に手首を活用した柔軟な台上アタックが目立った。

○フットワークの向上…大きく動くことよりも、一歩目の出足の速さが鋭く、スピーディなフットワークが出来ている。身体の軸振れもなく、身体能力が非常に高い。

○ボディワークの強さ…フットワークをしてアプローチしようとするが遅れると見ると、広いスタンスのまま両ハンド攻撃が出来る。したがってカウンター両ハンド攻めが多く出来る。

○タッチの短いサーブ力…少ない変化量で、相手に見破られない同一スイングでのサーブ

が効果的であった。

② 戦術編

○作戦・戦術の組立て、変更が的確で、その判断能力が高くなった。したがって、試合の流れを読み、緩急のあるボールの使い分けや、コースの厳しさが群を抜いている。

○相手の戦術の組立てを読み取る能力が高く、自分のプレイの引き出しが多く、戦術にたけている。

6. まとめ(日本選手の今後の課題)

- 1) 台上プレイが攻撃的でブロック技術からカウンター技術へ進歩する。
- 2) 戦術面と体力面に不安がある日本選手。
- 3) ボディワークを使い、無駄な動きをなくし、日本伝統のスマッシュ打法を鍛えることが大切。

以上のことから、今回の大会を振り返り、おもに技術面や戦い方について、報告するが、日本の若手を中心とした有望な選手が、さらに経験を積み体力の強化に励むなら、「世界の常識」になっている台上を果敢に攻め、打たれたら、打ち返すダイナミックな卓球が、近い将来、日本選手が中国の厚い壁を破ってくれることを期待する。